

水道橋博士「博士の異常な健康」魔法の絨毯: バイオラバー



魔法の絨毯、バイオラバーの正体に迫る！

諸悪の元凶は肩こりだった

この話は実話である!!

と、劇画原作者、梶原一騎調で書き始めてみたが、今回は誇張など一切なしで語りたい。

そもその始まりは、肩こりからだった。

ちょうど30代を過ぎてから、俺の健康上の最大の課題は、20代の後半から始まった深刻な肩こり、それに伴う頭痛であり、その症状は年々悪化の一途を辿っていた。

なんとか解消させようと、スポーツジムや水泳、カイロプラクティック、マッサージなどに足繁く通ったが、それでも重石をのせているような違和感に悩まされ続け、師匠のピートたけし以上に、1日中、大袈裟に首を回す動作を繰り返していた。

数年前に鎮痛効果の高いインドメタシン入りの消炎剤「バンテリン」注1が市販薬として発売された時は、喜び勇んで飛びつき、そのCMに出ていた有名人たち、つまり松木安太郎、山本浩二、マック鈴木の誰よりも愛用していた。何故、俺にCMの出演依頼が来ないのかと思うくらい、毎回、薬局でまとめて箱買いして、ひと月に軽く4~5本は使い切っていたほどだ。

実際、頻繁に使用しすぎたせいで、ジェルの塗りすぎから、肩の皮膚が赤くただれてしまい、楽屋で着替えるために裸になると、肩こりそのものより、肩のかぶれを心配される始末。

我が家に住み込むスズキ秘書は、每晚、俺からマッサージをせがまれ、冗談抜きで「按摩師か鍼灸師の免許を取れ！」とまで俺に言われていた。

そして頭痛の方も、パソコンに向かう仕事のせいか、酷い時には歩いただけでその振動から頭に鈍痛が走るほどだった。

おかげで「1日に6錠まで」と用法に書かれてある鎮痛剤を、我慢できなくて1日20

錠以上も飲んでいた。この鎮痛剤漬けによって、普段からフラフラと情緒不安定になり、かつての華原朋美以上の挙動不審ぶりに、周囲の人間の表情の方が沈痛になっていったのだった。

自分でも「さすがにこれは何か脳に障害があるのかもしれない」と不安になり、人間ドックに入った際、脳の断面図を撮る MRI 検査を受けることにした。

すると、医師による診断結果は驚くべきものであった。

「脳に障害は見当たりませんが、痛みの発生箇所からいって、もしかして肩こりが酷くないですか？」

つまり、頭痛も強度の肩こりが原因、震源地だったのである。

かように、もう懲り懲りな、超強力な肩こりであったのだ。

しかし、あることがきっかけで、今現在、この深刻すぎる肩こりの、その一切がなくなったのである！

文字通り、肩の荷が下りたのだ。しかも永遠に。

「笑いのネタ」のはずが・・・

ことの発端は、2003 年の 3 月 1 日（あえて日付も正確に記すことにする）。我が家の設計をしていただいた建築士の神代夫妻とお会いした時のことだ。

この夫婦は、共に一級建築士（今は、何かと問題のある建築士もいるようだが、俺の場合は、心から良い先生に当たったと安堵している）で、旦那さんは大手のゼネコンに長く勤め、総合から個人まで多岐に渡る病院建築を専門に担当している。その関係で、医療機器、健康関連グッズには並外れて精通しており、医学的見地からもその是非を語れる人であった。

それまでも、ことあるごとに健康マニアの俺といろいろと意見交換してきたが、俺の深刻な肩こり、頭痛ぶりに、「もしかしたら効くかも・・・」とお二人から教えてもらったのが、この「バイオリバー」との初めての遭遇であった。

健康グッズに詳しい俺だが、見たことも聞いたこともなかったシロモノである。しかし奥様によれば、「もともと私が見つけたんだけど、頭痛だけじゃなく、胃にポリープができた時も、これをお腹に当てて上から何度もさすっていたら、一週間で消えたのよ」と言うではないか。

そんな馬鹿な、「アラジンと魔法のランプ」じゃあるまいし、さすっていたら奇跡が起きて病気が治ったなんて・・・。

一般的に高学歴な人ほどオカルトにハマりやすいなどといわれるが、神代夫妻に関しては、決してそういう類の人ではなかった。

もちろん、俺も靈感グッズのような物はハナから一切信用していない。とにかく「試す」

ことも「騙されてみる」ことも笑いのネタとしては大好きであるが、よくある民間療法の効果のほとんどを「しょせんプラシーボ効果だろ」の一言で片付けてきた性分なのである。

その時、神代夫妻が「ちょうど今、着けているのよ！」と実物をみせてくれたのだが、一片15センチの三角形で、どこから見ても、パソコンのマウスパッドにしか思えない、実に冴えない布切れであった。

しかも、これで値段が3万円というのだから、日本一の地価を誇る銀座「鳩居堂」前の土地もビックリ。そのチンケさに比べて、あまりに法外としか思えなかった。

さらに体の丹田の部分（へその下）に装着する場合は、専用ベルトを使用するが、色も肌色であり、形も不恰好で、正直に言えば、まるでポルノ男優の前張りのように見えた。うっかり、「俺、今ヘソの下にゴムを着けてるんだ」とか言ったら誤解されかねないだろう。

も、もしや、これは通販グッズでお馴染みのピラミッドパワーやヒランヤ・ペンダント、はたまたトルマリン・ネックレスや悪運退散の水晶玉と同種のものではないのか!?

そんなことを重いながらも、これが神代夫妻の薦めであったため、なんとなく気になってネットでいくつかの情報を確認してみた。

そこで読んだ説明によれば、このバイオラバーは、「高純度石灰石をベースにした発泡体ラバーに貴金属鉱物粒子などを練り込み、波長4～25マイクロメートルの赤外線放射機能を持たせたもの」で「人体中の水分子やたんぱく質を活性化して代謝を促進し、自然治癒力を増す働きがある」らしい。

最初は、なんのことやらさっぱり分らず、むしろこんな説明では、今これを読んでいる読者同様に、「胡散臭い！」の一言しか感想はなかった。

しかし、さらに検索してみれば、三菱商事がこの商品を取り扱っていたり、民間療法レベルではなく、いくつかの病院による臨床例（その多くは成人病治療に使われていた）が報告されていることから、「もしかしたら・・・」と、やや見直した部分もあった。とはいえ、それまでもまだ半信半疑ですらなかったが。

その後、通販グッズの失敗談の面白コラムでも書けばもっけの幸いと、あくまで笑いのネタ作りのつもりで、実際にバイオラバーを購入してみた。

俺の思惑通り、この三角形マウスパットもどきを身に付けていると、案の定、周囲からは「何それ?」「怪しそう」とウケた。楽屋で芸人仲間に話しても、ラジオで紹介しても、これらの話をするたびに「バカだねえ～」というリアクションがあり、反応がすこぶる良いのだ。

それならば・・・と、さらに騙された気になって、翌月、今度はシートタイプのを、なんと12万円(!)もはたいて購入。「これが効くんですよ！」とあくまでその効果を信じ込んでいる演技として、睡眠時はもちろん、外でもマントのように羽織ったりして、自らの妄信ぶりをさらに強調し、笑っていただいていたのだった。

そして、そろそろ「笑い」で元値も回収したであろうと思えた、購入1ヶ月後のこと。ふとある事実に気がついたのである。

「あれ？ 考えてみれば、俺はすっかりバンテリン使ってねえぞ？ それに頭痛薬も飲んでねえし……」

そう、あくまでシャレのつもりでバイオラバーを着用していたら、何故かいつの間にか肩こりが消えてしまったのだ！

しかも、それはただの思い込みレベルではない。よく英語には「肩こり」を表す単語がなく、概念そのものがないと言われるが、俺も欧米人並み「肩こり」という自覚症状そのものが一切消えてしまったのだ。

まれに「マッサージなど生まれてから一切受けたことがないし、受けたいとも思わない」という人がいるが、その時の俺は、完全にそのレベルだったと思う。実際、我が家の恒例であったスズキ・マッサージ店も、その後は完全に休業状態になってしまい、一瞬、「これならスズキ秘書の存在自体も不要かも……」とリストラ計画が持ち上がったほどだ。

そして、その現象は今も続いている。

現在では俺の肩は常に「ほぐれている」という状態で、バンテリンやカイロプラクティック、水泳はもちろん、以前ジムに行き入念にやっていた柔軟体操の必要すらなくなったほどだ。

こうなってくると、この小さいゴム辺を片時も手放せなくなってくる。まさに愛すべき“マイ・リトル・ラバー”である。

それでも、ますます深まる疑問。不思議すぎる……。

一時的に改善したのではなく、症状が完治したというのが解せない。何がこれほどの効果を生んだのか？ とってもバイオラバーの性能だけとは思えない。

ひょっとしたら、大金を支払ったことによる、究極のプラシーボ効果なのか？ ただの思い込みに過ぎないのか？ いや、俺は何かを騙されているのではないか？ 次々に思い浮かぶ「何故？」の嵐と共に、どうしてもこれを作っているところへ行って、自らの目で確かめたいという、俺の実証主義への強迫観念は収まりがつかなくなってしまった。

そして、ここからの行動が実に俺らしかった。

突撃取材！ バイオラバーの製造元を探せ！

2003年の4月19日、大阪の別件の仕事のついでに、俺はカミさん、京都の友人を連れて、取材というよりも、ほぼプライベートで、バイオラバーの製造元「山本化学工業」に直接出向いたのだった。

突然の、東京から一タレントの会社訪問である。しかも番組取材の態でもなく、家族連れで訪れたのだから迎え入れた先も、さぞ驚いたことだろう。

この直接訪問の前は、正直に言えば、雑居ビルの一室にある通販系の胡散臭い会社を想像していたのだが、実際に訪ねてみれば、大阪の生野区、立地的に言えば下町の町工場で

はあるだろうが、そこには堂々たる自社ビルが建っていたのだった。

後に知ることになるのだが、あらためて山本化学工業の社史を紐解けば、創業 143 年の歴史を誇るゴム製品では世界有数の企業であり、この会社の製品には我々でもよく知っている物があるのに驚いた。

株式会社なる前身の「山本化学研究所」時代、1956 年に消しゴム付き鉛筆のゴム部分を開発し、特許を取得。大ヒット商品として世界中で使われている、あの消しゴム付鉛筆は、この会社の発明だったのだ。

1964 年に「山本化学工業」として会社設立後、ウエットスーツの開発に着手。その素材の高い品質が認められ、有名ブランドにウエットスーツ用のラバーを提供している企業として世界のシェア 60% を誇る。プロのダイバーやトライアスロン選手が使う競技用に限ってみれば、ほぼ 100% だという。

どおりで、バイオリバーの質感がウエットスーツに似ているわけだ。

ガッテン！ ガッテン！

ちなみに、ゴムのスーツのフィット感がタマらないという、その筋の特殊なマニアの間でのシェアは……どうやら、その統計はないらしい。

また、山本化学工業の事業分野のひとつに、メディカル分野に対する特殊素材の供給もあるのだが、その中心となっているのは X 線防護用の遮蔽素材の開発・製造であり、そのシェアも国内トップ。さらに整形外科で使うサポーター用のゴム素材では、国内シェア 80% を誇っているそうだ。他にも、飛行機や自動車、鉄道車両などで振動を防ぐ際に使われる緩衝材の製造も盛んで、米国の戦闘ヘリコプター「アパッチ」や欧米の有力航空機や車両にも、この会社のラバー製緩衝材が使われているのである。

業績も子会社の販売も含めると売上高は 36 億円。経常利益は 2 億 8000 万円。売上高経常利益率は 7, 8% に達する超優良企業なのだ。

うん？ なぜにこんな「会社四季報」みたいなことを長々と書いているのかって？

つまり、バイオリバーを「大様のアイデア」チックなグッズと考えていた俺の予断に反して、山本化学工業は非常に健全な企業だし、怪しいどころか**ラバー素材の分野では世界的に名の知れた存在**だったことを、まず最初に強調しておきたいのだ。

この日、応接室で面会した社長の山本富造氏は創業社長の 2 代目。まだ 40 代の若さであるが、大阪の社長でありがちな、商売っ気満々の関西弁口調でまくし立てるようなところはなく、実に丁寧な語り口、落ち着いた物腰で我々を迎え入れてくれた。

さすがに俺の突然の訪問に驚かれていたので、早速ここを訪れた経緯—長年持病の肩こりに悩まされてきたが、半信半疑でバイオリバーを使用してみたら劇的に効いたこと—を感謝と共に告げた。

すると社長は「そういう使用法は珍しいですねえ。でも、それも明らかにバイオリバーの効能のひとつなんでしょう」と事もなげに答えた。

そして「バイオリバーは、主に医療用に使われていて、さまざまな病気の療法に試され

ていますが、特にガン治療の最前線で、数々の臨床例もあるんです」と言うと、臨床例の報告書や数々の研究所から集められた実験データなどの資料を取り出した。

資料に軽く目を通し、数字の羅列を確認しつつ、表向きは「すごい！」と驚いてみせたが、猜疑心の強い俺は心の中では、実は得心していなかった。

「じゃあ、どうして、そういう現象が起きるのかを、もっと俺にもわかるように説明してください」

俺は改めて要望した。

バイオラバーとは一言で言えば、何か？

まず、単刀直入に、バイオラバーとはズバリ何なのか、質問をぶつけてみた。

「一言で言えば、人間にもっとも良い“波長”を放射する装置なんです。たとえば、赤外線カメラで見れば分かるんですが、バイオラバーは、その人間がもともと持っている波長と最も適した電磁波を発するんです」

このペラペラのゴムから電磁波がでてきているというのは、にわかには信じがたい。

「ゴムといっても天然のゴムや石油から作られる合成ゴムとは違って、バイオラバーの基礎になっているのは、新潟の黒姫山で採れる炭酸カルシウムを99.7%以上含んだ、極めて純度の高い石灰石なんです」

ただのゴムじゃなかったのか。見た目も質感も、単なる安物のマウスパットにしか見えないのだが……。

「一見しただけは分かりませんが、バイオラバーの構造は非常に複雑です。このラバーは、直径1ミリの中に約23個の気泡を持つ極めて微細なハニカム（蜂の巣）状の構造になっています。もともとはウエットスーツの保温性を高めるために開発した構造ですが、その製法には高い技術力、専門用語で言えば、ナノテクノロジーを要します」

思わず「そうナノ！」頷いてみたが、今でこそ、ナノ技術は日本のテクノロジーの主役になりつつあるものの、2002年当時はそんな言葉、ほとんど聞いたこともなかった。

1ミリの中に23個の気泡って……。

構造については、資料の図解を見て、なんとなく分かってきたが、それでも正直、まだまだ疑問だらけだった。

そもそも俺には、性能自体がよく理解できていない。

そこで、山本社長にバイオラバーが人体にどのような効果をもたらすのか、分かりやすく説明してもらった。

「先ほどもお話しした通り、バイオラバーの最大の特徴は、人体に影響を与える電磁波、具体的に言えば、波長4～25ミクロンの赤外線を持っていることです。この赤外線は健

康な人の体が帯びている電磁波と共通の波長を持っているので、人間の体を構成している水分やタンパク質など、あらゆる体内物質に“共振関係”を生むことによって、それらの物質の分子間の活動を活性化させるんです」

う～ん、分かるような、分からないような……。どうやら、まだ社長と俺との間に“共振関係”ができていないようだ。しかし、この説明で、「わあ、なるほど！今すぐ買います！！」などと口走っていたら、それは共振ではなく、“狂信”ということになってしまう。

もっと一般の人でも分かるような例はないだろうか。

「そうですね、分かりやすく電子レンジにたとえてみましょう。電磁波のひとつであるマイクロ波を物質に当てて、物質の分子の振動を活発にして温度を上げるのが電子レンジの原理ですね。そのマイクロ波を最も人間の体に優しい電磁波に置き換えるんです。そこで起きる分子同士の共振効果によって体の中の分子、それぞれの振動が大きくなり、その振動によって分子間の結合状態が均一化され、それが人間の自然治癒力を呼び起こすわけです。今までのところ分かりますか、博士さん？」

まったく、どっちが“博士”なんだよ！ と突っ込みたくなるが、だんだんと俺の中にも理解が生まれてきた。

つまり、俺の肩こりも、体を構成している水分子やたんぱく質分子の結合状態が悪くて、いわゆる“コリ”と呼ばれる状態になっていたものが、バイオリバーの放射する赤外線により、分子間の結合が小さくなってほぐれたというわけだ。

しかし、ここまできて、やはり、こんな小さいゴム切れに、そんな機能があること自体が、どうしても想像できない。

「でも博士さん、逆に聞きますが、あなたが病院へ行って薬を処方されたとして、その薬が病気に効く合理的な理屈をちゃんと知っていますか？」

この質問には答えにつまった。「医者からもらった薬がわかる本」などで調べることはできるが、薬の分子構造まで理解している人は普通まずいないだろう。

「しかも薬は、バイオリバーよりもっと小さいですよ。それなのにその効果については、なぜか疑念がないわけです。医者が出す化学薬品は皆さん盲目的に信じていますよね。だから現代人は薬漬けになるんですよ！ 対症療法としても、バイオリバーは西洋医学の薬品のような副作用の危険性もないし、手術による傷もない。さらに言えば、東洋医学の鍼や灸のような痛みもない治療法と理解して欲しいんです。」

理系知識に疎い俺だが、実際、この薬にまつわる社長のたとえ話が、一番、なるほどと思わせるものだった。副作用も手術の傷も痛みもないという話が、俺には薬品や針や灸よりも……。効いた。

電磁波には「善玉」と「悪玉」がある

バイオラバーは、特殊なゴム素材である、**X線の遮蔽素材の開発から生まれたもの**だという。代表的なものに、レントゲンの撮影時に、レントゲン技師が着ている鉛のエプロンがある。鉛は体に有害な X 線をはじめとした放射線の多くを吸収して遮ることができるのだ

X線遮蔽素材のさらなる高性能化を目指し研究を重ねていた過程で、山本社長は「人間のものの波長とは、一体どんなものなのだろうか？」という疑問が生まれてきた。そうして、人体に最も好影響を与える波長を探していくうちに、いわゆる“善玉”電磁波を発見。その結果、現在バイオラバーに織り込まれている金属や鉱物（金、銀、プラチナなど）の波長が、人間と最も波長が合うという事実と辿り着いたのだ。

ここで新たな疑問。金属の波長を自然治癒力に利用するのであれば、これは「ゲルマニウムブレスレット」やゴルファーの間で流行った「ライマ」などと理屈的には近いのだろうか。実際、肩こり解消グッズも見たこともあるが。

「確かに似てますが、放射量が全然違います。バイオラバーの気泡構造は、10センチ四方のラバー1枚でも、表面積を計算すると畳30畳分あるんですよ。そこから放射される電磁波が強力だからこそ、人体が吸収することで体を構成している細胞が活性化していき、内臓や神経などが健康なバイオリズムを維持できるようになっていくんです。だから原理的に言えば、バイオラバーは大きければ大きいほど効果も強いです。

その説明に、畳30畳大のライマを身にまとったゴルファーの姿を想像し、思わず笑い出しそうになった。ちなみに、“善玉”があるんだったら、逆に人体に悪い波長の“悪玉”電磁波もあるのだろうか。

「日本は世界の中で最も**“悪玉”電磁波だらけの国**ですよ。送電線や携帯の電磁波の危険性はご存知でしょう。以前は発ガン性を含めて人体への悪影響について、かなりメディアでも報道されていましたが、これだけ社会に携帯が普及したら、電磁波の人体に与える影響そのものを警告することができなくなってきているんです。プラズマテレビやパソコンにももちろんあります。新幹線や飛行機に乗っていると皆さん疲れるでしょう。それは電磁波が最も強く出ている場所だからです。でもバイオラバーを身に付けているだけで、その“悪玉”電磁波被害はブロックできるし、まったく体調が変わってきます。これだけの電気製品に囲まれた社会になった以上、もう振り出しに戻すことはできないのだから、電磁波の悪影響から身を守ることは、自分でやるしかないんです。でも、これはいくら言っても、今さら意識的になるのは難しいでしょうねえ……」

電磁波問題は確かに、昔に比べて極端にメディアからのアナウンスがなくなった。問題が根本的に解決したわけでもないのに。

余談だが、その後パナウェーブという謎の白装束集団が世間を賑わし、「電磁波から身を守るため」とさまざまな寄行を繰り広げた結果、ますます、電磁波問題の本質的な議論が遠のいたと思えるのは、俺だけではないだろう。

バイオラバーの大衆化に向けて

閑話休題。ここでさらに新たな疑問。そんなに良い製品なら、何故、広く一般に普及させるために、大量生産して値段を下げないのだろうか？

「実際、それはとても難しいことなんです。バイオラバーは精選された石灰石を高温で熱して発生したガスから作った特注の合成ゴムを使っているんで、そこにどうしてもコストはかかるんです。また、ラバーの中に練り込む金や銀、プラチナなどの貴金属鉱物も、純度の高いものを惜しまずに使っています。装飾品で使うような精製されたものではないので、貴金属と価格がイコールではないですが、これらの鉱物の原材料が大きく値下がりすることは、まずあり得ません。さらに、ハニカム状の気泡体のひとつひとつの壁面に、均一に貴金属が入っていないと効果が出ないために、金属の入っている鉱物を超微粒子にする必要があるし、ラバーの制作工程も長期間です。少々の大量生産ではコストダウンは不可能なんです」

う～ん、大阪商売人らしいリップサービスは完全になし。企業努力でそこをなんとかありませんかね、と食い下がってみても山本社長は淡々と語るのみである。

「本当に無理なんです。でもひとつだけフォローをさせてもらおうと、バイオラバーは消耗品じゃないんです。原理的に言っても買い替えの必要はないし、半永久的に使えます。薬のように飲み続け、ランニングコストがかかるものではありません。家族で使いまわしてもいいんです。電化製品のように常に新製品を買ってもらってもいい必要もないですよ」

なるほど。それは絶対的な長所だ。「うちではゴムを使いまわしています」と言うと、誤解を招くのではないかという懸念も、なきにしもあらずだが・・・。

「そのかわりに、私自身も商業ベースでは販売しておりません。商売は本業で十分儲かってますから。大阪の商人ですし、これは綺麗事を言っているのではないんです。現に今、会社にはバイオラバーの部署があるわけじゃないし、私一人で、社長の道楽と思われながら個人で動いているんですよ」

臨床例がこれだけあるわけだから、もっと大宣伝で広めたり、保険が利くようになったりもできるんじゃないかとも、俺なんかは勝手に思うのだが、医学界で認められるのはそう簡単な話ではないらしい。

「バイオラバーに関しては、将来、医療財団にするのが私の夢なんです。ただ、うちのような一企業が、いくら臨床例や研究機関のデータを見せて宣伝しても、今は無意味なんです。だから、まずは日本の学会、大学など第三者機関で正式に認められてから、その後、より権威のある専門機関に承認を受けて、ようやく本格的に事業展開を考えればいいと思っています」

ここまでの社長と俺の会話を読んでみて、皆さんはどう思われたらろう？

現代では、さまざまな自説を展開するインチキ療法が多々あり、連日のようにニュースになっている。

記憶に新しいところでは、カルト集団の「次世紀ファーム研究所」一。

ヒメガマという植物を原料とする健康食品「真光元」、それに含まれる「光合掘菌」が病を治すと主張し、研究所に滞在していた重度の糖尿病患者の女儿へのインシュリン注射を怠ったことで死亡に至り事件化した。あの時、光合掘菌の作用で効くと、さも科学者のように朗々と語った堀洋八郎代表は、テレビを見る誰からも、あからさまにインチキ臭く見えたことであろう。

そして、事情を知らない人から見れば、この時、社長とマンツーマンで会話している俺も、何やら新治療法を見出した教祖に、すっかり洗脳されている信者のように見えるかもしれない。俺以上に猜疑的な人は、そもそも、あのラバーを見て、その値段を知っただけで話も聞かないことだろう。

しかし、バイオラバーによる実際的な効能・身体的変化があっても、まだ疑念を持ち続けた俺も、実際の会社を目の前で見て、その業績を知り、社長と言葉を交えたことで、すっかり印象を変えた。

俺は今まで、テレビ番組で数々の名物社長と共演してきたが、山本社長は実直すぎて面白みに欠ける。経営者というより技術者に近い。しかし、その技術者が掴んだ“確信”を語る生真面目な話ぶりは拝聴に値するし、何より、その人を頼らない不器用な布教ぶりに、おのずと応援したくなった。

いや、俺は、この山本社長と文字通り“波長”が合ったのであろう。

そして、長年苦しんだ強固な「肩こり」が雨散霧消したという一点で、文字通り、バイオラバーに「肩入れ」した。

俺が山本化学工業を初めて訪れた当時、バイオラバーの効能を説明する公式ホームページはなかった。しかも、社長はウエットスーツ素材の輸出のため海外出張で多忙を極めていたが、日本ではバイオラバーの実演、実証、販売後のアフター・ケアのため休みを返上。社員を派遣するわけではなく、東奔西走していたのである。

実際、効き目がない、とクレームがあった購入者や、外出の出来ないような重度の患者に対しては、社長がその相手の自宅まで足を運び、正しいバイオラバーの使用方を説明し、場合によっては、その人の担当主治医とまで治療方針を相談するというような、信じがたいほどの面倒を引き受けている様子を何度も伝聞した。

傍から見ても、このネット時代に、あまりに非効率ではないか？

そこで、この宣伝下手、世間の熱視線をもラバーで遮断してしまう社長のため、俺は自ら“社外応援団”を買って出て、自分のホームページからリンクしてバイオラバーの応援、質問サイトを作った。そして、そこに来るバイオラバーへの質問、さまざまな治療の問い合わせなどを、俺がメールで受け取り、それらの質問をメールで社長に送り、さらにその答えをパソコンの苦手な社長がわざわざ手書きのFAXで我が家に返信してきたものを、

再び俺がホームページにアップするという、恐ろしく原始的な作業を2年以上続けたのである。

このFAXは今でも保管しているが、ネットを通して届けられた見ず知らずの人からの質問に対して、一人ひとり手書きで誠実に答える社長の親身な文字に、俺は“算術”とは思えぬ“仁”を感じた。

ネット上の応援活動だけでなく、当初はバイオラバーの効能を周囲にも喧伝し、吹聴して歩いていたのだが、まるで心靈商法の広告塔のように思われ、俺の人格を疑われること多々あった。そりゃあそうだ。怪しげなゴムでできたベストを着込み、本気で「体に最も良い電磁波が出ているんだよ」と説明してみたところで、周囲の人からは不審がられ、完全に“電波系”扱いだ。

あまりにも誤解を生むようなので、俺はその後、誰かに熱心に聞かれないかぎりは、バイオラバーの話を他人に持ちかけることは一切止めた。

しかし今でも俺は、新幹線や飛行機に乗る時はもちろんのこと、普段でも四六時中バイオラバージャケットを着用し、加えて最近では120×100センチの特大サイズのバイオシートで睡眠している。

また、雑誌連載時には、なお一層誤解されるのを避けるために、俺自身の肩こり解消体験に話を絞っていたが、バイオラバーは実際のところ、ガン治療の現場で使われている例が多いのだ。だからこそ、その後、身内や近親にいるガン患者には、俺の自己責任の中でバイオラバーの存在を知らせたりもしている。

この当時、社長は近々に米国のガン学会でバイオラバーの治療効果に対して公式発表があると力説していた。もしそうなったら、青色発光ダイオードのような日本人による世紀の発明になるかもしれない、と大袈裟に夢見るほどに、俺はその日が来るのを心待ちしていた。

俺が一方向的に肩入れしたバイオラバーは、本当に魔法の絨毯なのか、あるいは単なるプラシーボ効果に芸人がバカ騒ぎしているだけなのか、一刻も早く証明してほしかったのだ。

遂にバイオラバーが認められた！

会社を訪問してから2年の月日が経った。その間、山本社長が言っていた米国の第3者機関からの発表については、残念ながら、その続報を耳にすることはなかった。

しかし、2005年5月14日一。

新聞の朝刊各紙は、一斉にそのニュースを伝えた。

遠赤外線反射の特殊素材　がん増殖抑制効果一兵庫医大教授研究

遠赤外線の反射率が極めて高い特殊素材をがん細胞の近距離に置くと、がん細胞が自滅する仕組み（アポトーシス）を持つ遺伝子が活発になることが、島博基・兵庫医大教授（泌尿器科）の研究でわかった。

13日（現地時間）に開幕した米臨床腫瘍学会の報告に掲載された。

特殊素材は大阪市の化学メーカーが、高純度石灰石に貴金属や炭素などを混合して開発。無数の気泡が細かな網目を作ったような構造で保温性が高く、ウエットスーツなどに利用されている。

実験は、フラスコ内で培養した前立腺がんの細胞の上下に特殊素材を置き遺伝子を解析。3週間目で遺伝子のアポトーシス回路が活発に働いていた。

さらに、がん増殖抑制機能が高濃度の場合に働く腸管内物質「酪酸ナトリウム」を3種類の前立腺がん細胞に投与した培養試験でも、特殊素材を置くと、8日目には抑制効果が3倍以上高まることも分った。

（2005年5月14日 毎日新聞 朝刊より）

毎日新聞以外にも、朝日新聞・産経新聞でこのニュースは大々的に報じられた。全国紙の紙面にこのような「がん増殖抑制効果」と具体的な文字が出ることは極めて異例なことである。

そしてこのガン問題は後述するが、もうひとつ別の新聞記事もご覧いただきたい。パイオラバーを巡る社長とのやりとりの中で電磁波の問題にも触れていたが、ちょうどこの文章を書いている2006年の1月中旬、以下の記事が読売新聞の一面を飾ったのである。

電磁波対策、初の国際基準・・・科学的解明待たず
WHOが原案 健康被害を予防

送電線や家電製品などから放出される電磁波が健康に与える影響を調べている世界保健機構（WHO）は、電磁波対策の必要性や具体策を明記した「環境保健基準」の原案をまとめた。電磁波に関する初の本格的国際基準で、WHO本部は「今秋にも公表し、加盟各国に勧告する」としている。日本政府は電磁波について「健康被害との因果関係が認められない」としているが、基準公表を受け、関係各省で対応を協議する。

原案は、電磁波による健康被害の有無は「現時点では断言できない」としながらも、発がん性について「（30センチ離れたテレビから受ける最大電磁波の5分の1程度にあたる）0.3～0.4μT（マイクロ・テスラ）以上の電磁波に常時さらされ続ける環境にいと、小児白血病の発生率が2倍になる」とする米国や日本などの研究者の調査結果を引用。科学的証明を待たず被害防止策を進める「予防原則」の考え方に立ち、対策先行へ

の転換を促す。

具体的な数値基準については、各国の専門家で作る「国際非電離放射線防護委員会」（本部・ドイツ）が1998年策定した指針（制限値＝周波数50ヘルツで100 μ T以下、同60ヘルツで83 μ T以下）を「採用すべき」とし、強制力はないものの、日本など制限値を設けていない国に、この指針を採用するよう勧告する。

また、各国の事情に応じ、送電線などを建設する際の産業界、市民との協議を求める。対策例として、送配電線の地下化や遮へい設備の設置などを挙げている。

政府は、WHOの基準公表後、環境、経済産業省など関係6省による連絡会議を開催する方針。「費用対効果を勘案し、有効な予防策を考えたい」（環境省環境安全課）としている。

電磁波研究に携わっている財団法人・電気安全環境研究所（東京都渋谷区）は「電力会社や家電メーカーも対応を考えざるを得ない。電磁波防護の費用が価格に跳ね返る可能性もあり、消費者に十分説明して理解を求める必要がある」と指摘している。

90年代以降、欧米の疫学調査で、「送電線付近の住民に小児白血病が増える」などの報告が相次いだことから、WHOは96年、「国際電磁界プロジェクト」をスタート。日本を含む約60カ国の研究者らが影響を調査している。

読売新聞は1面でこのように報じ、さらに2面でも詳しい解説を掲載した。

電磁波の予防原則 明確に WHO「疑わしきは回避」

電磁波に関する環境保健基準原案で世界保健機関（WHO）が明確に打ち出したのは、「疑わしきは回避せよ」という「予防原則」のメッセージだ。現状では、各国の調査研究は健康被害を立証しきれていない。アルコールや喫煙など健康に対するリスクは、身の回りにたくさんある。電磁波だけを過度に警戒する必要はないだろう。しかし、電磁波については、根拠のない健康への不安だけが先行したり、逆に全く無関心だったりするのも事実だ。最新の科学情報に基づく電磁波の特徴や影響を正しくとらえている人は意外と少ないのではないか。

電化製品に囲まれ、様々な電磁波を浴びながら暮らしていることを考えると、WHOが指摘するように、政府には、最新の研究で得た知見や防護方法について、情報提供する責任がある。環境ホルモンやダイオキシン問題などを機に、欧州では予防原則は環境施策の主流になりつつあるが、政府・産業界と国民との間の正確な情報の共有がそれを支えている。WHOの予防原則を踏まえ、政府は国民が納得できる情報の提供に努めるべきだ。（地

方部 高倉正樹)

(用語解説・[電磁波] 電気が流れる場所やその周りから発生する電気と磁気の波のこと。93年の通産省(当時)の報告書によると、家電製品から出る超低周波の電磁波はドライヤー2, 5~53 μ T、テレビ0, 1~2 μ Tなど。送電線の下は20 μ T。WHOの下部組織「国際がん研究機関」は01年、超低周波の磁場(磁気のある場)について「発がん性があるかもしれない」とした。

(2006年1月12日 読売新聞 朝刊より)

この記事で興味深いのは、「科学的証明を待たず……」

省略